

気づく心を育てる

佐藤和子



ゆっくりと流れて行く。私は、心地よい祭のざわめきにひたりながら、かき氷を食べていた。

ふと見ると、境内の堀にはあき缶や発泡スチロールなどの入れ物が山と積まれたり捨てられたりしている。このような光景は、ほんの一例にすぎないが、この中には、子供たちの捨てたものがあるかもしれない。

私のクラスには、自己中心的で友達もなく、勝手な行動をしがちな

A子がいる。ある時、A子が廊下に落ちいたごみを拾つたのを見つけた。チャンスだと思い大げさにほめ、学級のみんなにもA子の行動のすばらしさを知らせた。それ以来、A子はごみを拾うこと忘れないようになった。そればかりか、やがて机の中や身の回りをもきれいに整頓する

「先生、こんな所にあき缶がいっぱい捨ててあるよ」

子供たちは、どぶに半分埋まっているあき缶を拾い上げ、入っている泥水を音をたててあけている。

今日は、全校をあげてのボランティア活動の日である。私は、現在四年生を担任している。社会科でごみ処理の学習をしたためか、子供たちは大変意欲的である。しかし、実生活の中で一人一人がどれだけ意識し実践しているのだろうか。大きな不安が鉛のようにずしりと胸に残る。

夏休み、学区内の北宮諏訪神社のお祭に行つてみた。出店が軒を並べ、楽しそうに往来を歩く人の群れが、

子のよさをはぐくむことにつながつたと言える。

今の子供は思いやりがないと言われているが、その前に、ちょっと身の回りに目を向けさせる工夫をしてみたらどうだろうか。花を育てるともい、アルミ缶や紙パック類のリサイクル活動もいい、子供たちに

気づかせる材料は身の回りにたくさんある。それを見逃さず環境に対す

る関心を高めていくことが、今、教師に求められていることの一つではないでしょうか。

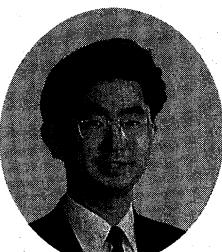
私は、これからもずっとと言い続けたい。

「ごみを捨てるということは、自分とのやさしい心をも一緒に捨てる」といふんだよ」と。

(喜多方市立第一小学校教諭)

五千円札

福地憲司



入試当日、彼は高価な鉛筆で問題に向かつた。出来は良くなかった。

「お母さん、俺、落ちたかもしれない……」「一生

落ちたかもしれない……」「お母さん、俺、落ちたかもしれない……」「一生

落ちたかもしれない……」「お母さん、俺、落ちたかもしれない……」「一生

落ちたかもしれない……」「お母さん、俺、落ちたかもしれない……」「一生

落ちたかもしれない……」「お母さん、俺、落ちたかもしれない……」「一生

落ちたかもしれない……」「お母さん、俺、落ちたかもしれない……」「一生

落ちたかもしれない……」「お母さん、俺、落ちたかもしれない……」「一生

ポケットには母からもらった五千円札。

高校入試の前日、彼は必要文具を

買いに出かけた。鉛筆・消しゴム・

定規……。家に戻ると、あるはずの

消え、ポケットからは内布がペロツ

と舌を出していた。「お、お母さん、

お、おれ、お金落としてきた……」

「仕方ないよ。明日、明日。母は

がめなかつた。彼は顔をそっと上げ

た。一天使の母が見えた――